

## とうきょうすくわくプログラム活動報告書

園名	久米川保育園
日時	令和7年8月26日

### 1. 活動テーマ

<テーマ>

自然・・・3歳児「夏野菜の枯れた根っこと熟さなかったきゅうり」

<テーマ設定理由>

春からプランターづくりを行い、土の入れ替えをして夏野菜の栽培の準備を進めてきました。苗の購入に当たっては、「どんな野菜があるか」「どんな野菜の苗を育てたいか」「野菜の苗はどこに売っているか」などを経験を通して学んできました。毎日お世話をする中で少しずつ育つ様子を眺めて、収穫を楽しみ、たくさんのきゅうりを収穫できました。そんな苗がどうなっていくかを探究しました。

### 2. 活動スケジュール

4月プランターの土をシートの上に出して、雑草を取り出す。  
夏に収穫できる野菜についての話をする。  
どんな野菜がいいか子ども達と一緒に考える。(購入は5歳児クラスに依頼)  
5月～7月苗を植え、水撒きをする  
7月～収穫時期を迎え、収穫して調理していただく

### 3. 活動のために準備した素材や道具、環境の設定

- きゅうりの枯れた枝や葉、根っこ
- 花がしぼんで熟さなかったきゅうり
- 根っこやキュウリを入れるトレイ
- トレイを置くビールケース
- 動画撮影用iphone

### 4. 探究活動の実践

<活動内容>

- 保育室の前で、春からプランター栽培を行ってきた。枯れる状態まで敢えて残しておいたので、まずはプランターに植えてあるきゅうりの苗木を抜く。
- 土の下から根っこが出てくる様子を見る。
- 花が咲いた後、きゅうりにならなかつたしぼんだ実の部分も併せて抜き取る。
- 根っこの部分の様子を見る。土がついている部分を払って落とす。
- 保育室前のテラスにビールケースを置き、その上に平らなケースを置いて根っこを観察しやすいようにした。
- 子ども達数人ずつのグループで、順次根っこの観察や手に取って触れる経験をする。

以下実践の記録参照

①トレイの上に乗せてあるもの「枯れたきゅうりの苗とその根っこ」「花がしぼんできゅうりの実が育ちきらずに小さな実をつけている」

A:トレイの上のしぼんだ花ときゅうりの実を手取る。手でつまむ。実を握るが柔らかい感触にすぐに手放す。

次に根っこを手にする。

T:「これなにかな?」

A:根っこを手にしたまま担任にまなざしを向け笑顔になるが、何かの質問には答えない。持ち上げて眺めている。

B:「Aちゃん、これ触ってごらん」 Bはきゅうりの実を掴んでAに手渡す。

A:Bに手渡される。先ほどはすぐに手放したが、Aに渡され、身の部分をつまんでみる。「きもちいい」と話す。

B:Aの言葉を受け「きもちいいね」と答える。

A:再び「きもちいい」と話す。

B:Aから実を受け取り、「Cちゃんに渡してみて」と言いながらCに渡す。

C:「Cちゃんもさわりたい」と言いながら、Bから実を受け取り、実に触れる。握ってみる。

D:Cが持っている実を触る。

T:「どう?持ってみて」

C:「これ、やわらかくてきもちいい」と答える。

B:Cより受け取り、再び手取る。「とってもいいかおり」

②B:枯れた葉を手にして「めっちゃくちゃいい、これ」と話す。

E:枯れた根っこを手をしている。頭上に掲げるようにして持ち、両手で触っている。

次に、きゅうりの実を手取る。実の下に垂れ下がっている歯に触れて「これさわってみて、めっちゃふわふわ」と言いながら葉を揺らしたりしている。その葉をFも触っている。

A:枯れた葉を持ち上げて「ぱりぱり」と言う。トレイに戻し、Bと一緒に眺めている。

E:Aがトレイに置いた葉を手に取り、感触を確かめている。

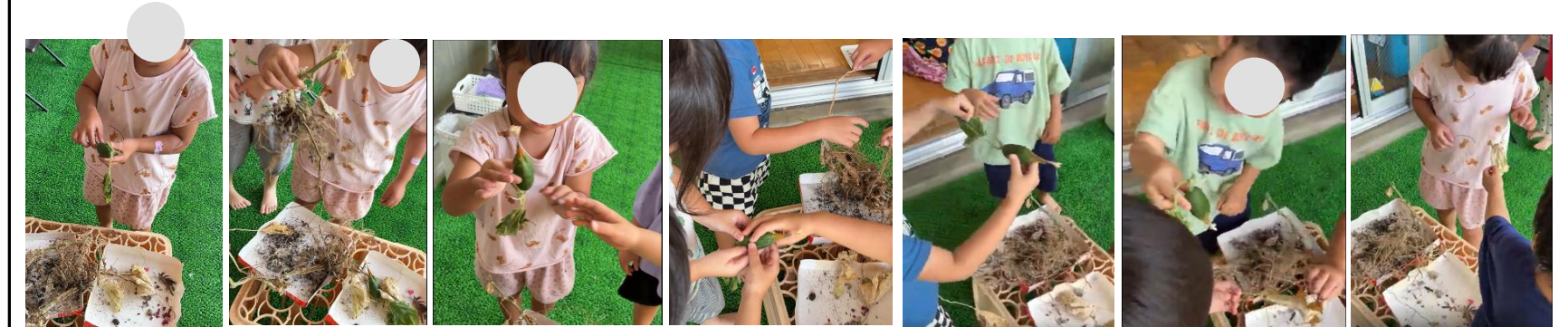
F:きゅうりの実を持ち上げて、実の部分に触り絞るようにして「おしっこ、じゃー」と言う。

E:再びきゅうりの実を手にする。「かわいい」「これ、ちっちゃくてかわいいですね」「すごいですね」と言う。

A:枯れた根っこを持ち上げて揺すっている。葉が手に当たり痛がる。痛い手を服でこするようになっている。

T:「葉っぱ痛かった?大丈夫?」 A:仕草で大丈夫なことを伝える。

B:その様子を見ていたBが、「これ触ってもBくん痛くない」「ちょびっとだけね」と言いながら枯葉をBに手渡す。



### 5. 振り返り<振り返りによって得た先生の気づき>

・枯れた葉を「ぱりぱり」、小さな実を「めっちゃくちゃいい」「かわいい」と表現し、やわらかさ・ふわふわ・痛さ・匂いなど、質感や状態の違いを自分の言葉で捉えている。こうした自然遊びは、身近な自然の不思議さや面白さに気づき、探究心を育てることにつながる。

・「収穫後」の根や育ちきらなかつた実に触れていることから、「生長して枯れる」「大きくならなかつた実もある」といったことを知る経験になっている。自然との関わりを通して、生命への関心や尊重する心が育まれるのではないかと。

・Aが最初はすぐ手放した実を、友だちから渡されて再度触り「きもちいい」とことばにしたり、Cが「やわらかくてきもちいい」と応じる姿は、感触遊びを通して心地よさや違和感を確かめ、言語化していると考えられる。感触を通して、感性や表現力を豊かにする活動になっている。

・枯れた葉を触って「痛い」経験をし、保育者が「葉っぱ痛かった?」と気持ちに寄り添っている。

・安全に配慮しながらも、こうした多様な感触を味わえる自然物の環境構成の重要性を感じる。

・BがAに「触ってごらん」ときゅうりを渡し、さらに「Cちゃんに渡してみて」と橋渡しをする姿や、E・Fが互いに葉や実を触り合う姿から、自然物を介して対話や共同性が育っていることがわかる。

・自然遊びは、友だちと気づきや感動を伝え合い、共感することを通して自分から関わろうとする力を育むと思う。

・Aが痛かった経験に対して、Bが「これ触ってもBくん痛くない」「ちょびっとだけね」と枯葉を渡す場面は、相手の様子を見て自分なりに配慮しようとしている。自然物が、思いやりや他者理解のきっかけになっていることに気づいた。

・保育者は「これなにかな?」「どう?持ってみて」とシンプルな問いかけにとどめ、子どもたちが自分から触れる・覗き込む・ことばにすることを尊重している。自然遊びでは、保育者が必要以上に干渉せず、子どもの自発的・意欲的な活動を支えることが大切。

・Aが答えなくても笑顔で見つめている様子や、子どもたちが代わりにことばで表現していく姿から、「言葉にしない観察の時間」も尊重したい。保育士自身も、子どもの視線の先や手の動きから興味・関心を汲み取り、次の活動(絵に描く・図鑑で調べる・他の野菜と比べるなど)へつなげていくことが大事なのではないかと。

・収穫を終えた苗や根・小さな実まで残しておいたことで、「育つ前」「枯れたあと」の姿も含めてじっくり観察できる環境が生まれている。野菜栽培は、種まきから収穫だけでなく、その後の変化を見届けることまで含めると、子どもの観察力や探究心をさらに深められる。

・今後は、写真や絵本・図鑑などを組み合わせて「生きているきゅうり」「枯れたきゅうり」「小さい実」の違いを一緒に比べたり、子どものことばを記録してクラスで共有することで、「自然との関わり・生命尊重」の姿がより明確になる。

・保育所保育指針のねらい(身近な環境に主体的に関わり、自然への愛情や畏敬の念をもつこと)を具体化する実践となっている。

・子どもたちは、枯れたきゅうりの苗や実に繰り返し触れたり言葉でやり取りしたりしながら、「自然の変化を五感で感じ取り、友だちと共有していく力」を育てている場面になっている。保育士にとっては、自然物を手がかりにした感触遊び・言葉のやり取り・他児への働きかけが同時に起きていることに気づき、環境の用意と関わり方を考える学びにつながった。